Ⅰ　総論編

1　知っているようで知らない言語活動

2　なぜ言語活動を充実させるのですか？

3　言語活動とは、どんな活動のことですか？

4　各教科等を貫く言語活動充実の在り方

(1) 学校では

学習指導要領が改訂になり、いよいよ平成25年度から年次進行によって全教科での実施となります。その学習指導要領で、注目すべき点の１つに言語活動の充実が挙げられていますが、それらの授業を通して何が求められているのでしょうか。

本年度から、各学校が作成する教育指導計画に「言語活動の充実のための計画書」を盛り込むことになっています。そこで、言語活動の充実のための計画を振り返って見てみると、教務主任の皆さんは言うまでもなく、各教科主任をはじめとして、「特別活動」や「総合的な学習の時間」との連関を工夫して計画する生徒指導主事や進路指導主事の先生方に至る多くの方が、

「これでいいのだろうか？」
「他校はどのように記載して取り組んでいるのだろうか？」
「いいアイデアを知りたい！」

と、気になっているところではないでしょうか？

そこで、各校の「計画書」の中から引用した例を見て、それらが各教科の言語活動の充実として適切なものか、下表の左端の評価欄に○か×を付けて、確認してみましょう。また、自校の計画と比較してみるのも良いでしょう。

評価	教科	言語活動の充実のための具体的計画内容例 ※平成24年度各学校作成の教育指導計画（様式８）より引用
	国語	１年で読書指導や漢字テストや意味調べにより語彙の習得を、２年で文章の要約練習を通して論理的読解力の基本を、３年で小論文の課題演習を通して論理的思考力と表現力を育成する。
	地歴	授業で取り上げる著名な人物や場所、行事、風習などについて調べさせ、レポートを作成させる。また、クラス内で発表させる。
	公民	発問の機会を増やし、積極的な授業参加を促す。（発問に従って導入部分で前時を想起させ一問一答方式で答えさせ、授業の終わりに内容をまとめて発表させる。）
	数学	演習問題の解説を生徒自身に行わせ、他の生徒からの質問にも答えさせる。
	理科	実験や映像及び、さまざまな理科の模型の活用を通して、生徒の五感を刺激し、専門用語に対する理解を深めさせる。

	保体	教官室の入室時には必ず挨拶と正しい言葉遣いを指導し、授業では体育委員に欠席や見学者の報告をさせるほか、全員での号令かけなどで言語活動の充実を図る。
	芸術	美術では、自然や芸術、建造物などの美しさに触れる体験的な場を設定し、感性を磨き、創造的な表現と鑑賞能力を高める。
	外国語	授業の中で、教師の後に単語や熟語・本文・基本例文の音読を行ったり、ＣＤを聞いて音読することで正しい英語の発音やイントネーションを身に付けさせる。
	家庭	学校家庭クラブ活動として実施している保育所訪問を充実させる。
	情報	情報機器を用いて様々なことを考えさせ、表現させることで、想像力や表現力を養う。
	農業	「食品製造」の実習前に生産から消費までの流通の仕組みや食品の管理方法について班ごとに発表させ、ノートにまとめさせる。
	工業	各専門学科において、専門用語を理解し、対応できる生徒を育成する。
	商業	「ビジネス基礎」において秘書検定合格を目指して秘書のマナー等を学ばせる。この中で、話し方・聞き方・報告の仕方等を学ばせる。

いかがでしょうか。他教科の内容がよくわからないこともあるかもしれませんが、それぞれの「言語活動の充実」を評価するのに、○か×かの判断が難しく「△があれば……」と思うものがあったのではないでしょうか。ということは、「工夫はあるがこれだけでは……」と不十分さを感じているということなのです。それを理解してもらうために、ここではあえて○か×かで区分するとしたわけです。こうして判断すると、残念ながら○を付けられるものはなくなってしまいそうです。

それでは、「言語活動の充実」として考えると何が不足しているのでしょうか。あるいは、どのような部分が良くないのでしょうか。そのような疑問点を解消するためにも、どうぞこの先へ読み進んでください。必ずや、疑問点の答えが見つかり、スッキリとすることでしょう。

学校では、目の前の生徒の力を伸ばし、希望進路を実現するために先生方の様々な取組がなされています。それらを司り、交通整理をしていくことをカリキュラム・マネジメントと呼びます。その視点で新学習指導要領で示す言語活動を明確につかみ、教科や学校全体で協議して取り組む。ここから、授業改善が進み、各学校の抱える課題を打破する契機となるのではないでしょうか。

(2)「言語活動の充実」に向けた課題

高等学校では、下記のような声もあって、ややもすると知識・技能の習得のための授業が中心となり、それらを活用する力をはぐくむこととのバランスを図れないことがあります。

生徒の実態から基礎的・基本的な知識・技能の習得で手一杯だ

授業進度の確保に追われて活動の時間が取れない

新しいことへのチャレンジは大変だし失敗を思うと取り組めない

入試が変わらなければ授業を変えられない

生徒の学習意欲が高まらなければ実践できない

各科目における具体的な指導方法がよくわからない

授業で試みたことはあるが効果がわからない

必要な知識をわかりやすく効率的に教えることが最優先だ

添削等に追われて教科での綿密な打合せをするゆとりがない

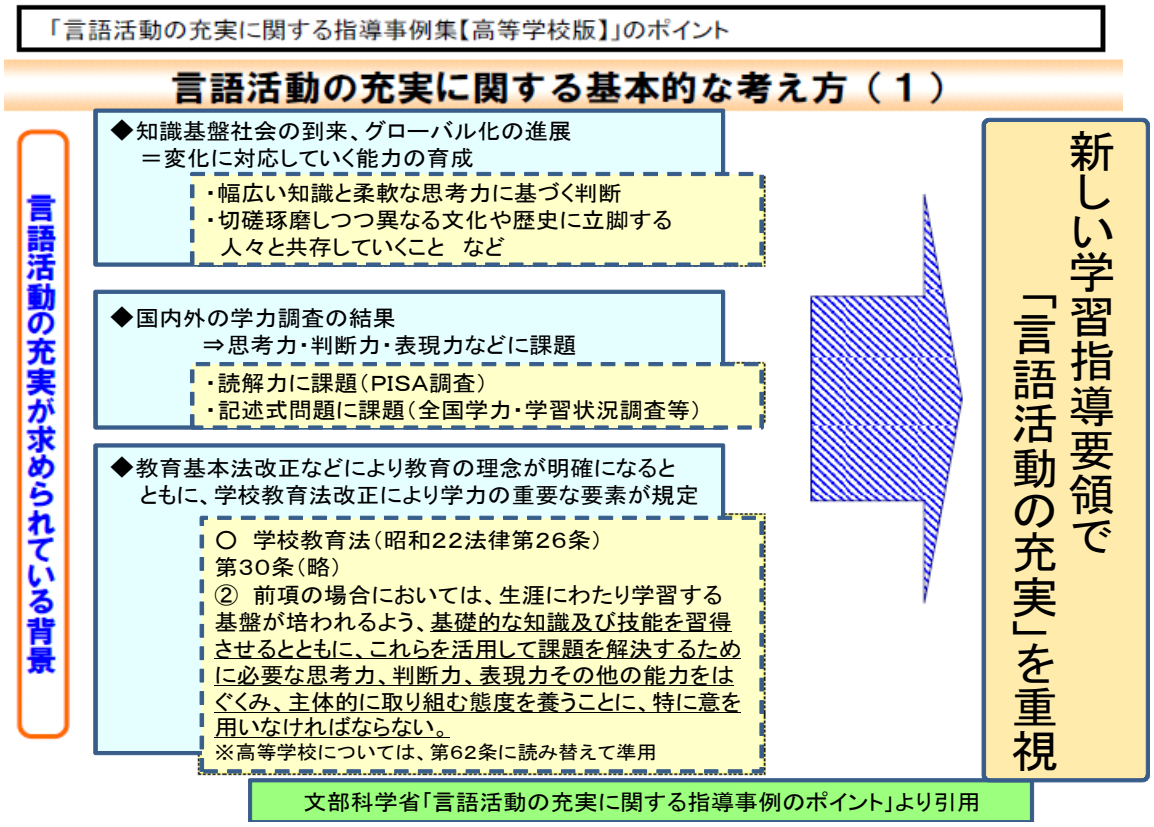
就職希望者に知識や資格を増やすことが何よりも大切だ

生徒の希望進路の実現とともに、生涯にわたって習得した知識・技能を活用できる生徒を育てるために、私たち教師一人一人の創意工夫が求められています。そのためには、個々人の努力だけでなく、教科全体で十分に話し合い、各科目の授業改善を図るという、組織としての取組が必要不可欠です。

では、上記のような声を解決して授業改善を図るために、これから言語活動についてより具体的に見てみましょう。

(1)「言語活動の充実」が提言された背景

言語活動の充実が、今回の学習指導要領改訂で「各教科を貫く重要な改善の視点」と位置付けられた背景は「言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】（平成24年６月、文部科学省）」で以下のようにまとめられています。



出典　文部科学省：言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】のポイント

なお、提言の背景の一つである、「国内外の各種調査の結果」では、児童生徒の読解力や表現力の低下に関して、例えば以下のような課題が見られました。

①　教育課程実施状況調査：平成15年度結果を平成13年度と比較した時、国語の記述式問題における正答率が低下した。

②　OECDの「生徒の学習到達度調査」（PISA調査）：平成15年実施結果を前回と比較すると、読解力の習熟度レベル別の生徒の割合において、成績中位層が減り低位層が増加するとともに、成績分布の分散が拡大し低下傾向が見られた。特に読解力や記述式問題に課題がある。

(2)「言語活動の充実」とは

単元で生徒に付けたい力を明確にした後、それにふさわしい言語活動を取り入れた学習活動を効果的に行うことが「言語活動の充実」につながります。よって、ただ単に言語活動を授業に取り入れるだけでは「言語活動の充実」とはいえません。

言語活動を充実させるには、次のステップで授業を構想していくとよいでしょう。

① 生徒に付けたい力を明確にする（具体的な生徒の姿で評価規準を作成する）
② 付けたい力にふさわしい言語活動を選定する（Ｐ16, 17を参照）
③ 生徒の課題解決の過程に言語活動を取り入れた学習活動を位置付ける
④ 思考や判断を促す発問や指示を準備する

また、思考・判断させる時間をきちんと確保するとともに、他者と協議するなどの活動を取り入れ適切に支援していくことが大切です。詳しくはＰ20～24に記載しております。

(3) 思考力・判断力・表現力等を高めるためには

思考力・判断力・表現力等をはぐくみ、課題解決能力を身に付けていくには、「論理的に思考する」ことが大切になります。「論理的に思考する」には、「判断とその根拠」「結果とその原因」を筋道立てて考えることが必要なのです。

PISA調査で明らかになった読解力や表現力の低下とは、資料等を読み取る力やそれを基に自分の考えを論理的に説明する力が不足していることを表しています。これは、目の前の状況から必要な情報を読み取り、その情報を基に課題を解決していく手立てを見つけていく思考力や判断力、その課題解決の過程や結果を表現する力を身に付けていないことが原因です。

「なんとなく～だと思う」「～のような気がする」等の表現は、根拠を示していないので、思考し判断した上での表現とは言えません。「これは～だと考える。なぜなら○○が・・・だからである。」のように、「～だと考える」という結論や結果について、「○○が・・・だから」という明確な理由や根拠を示しながら、論理的に説明できれば思考力・判断力・表現力等がはぐくまれているのです。

(4) 思考・判断させるための方法例

論理的に思考し表現することは思いを述べることではありません。例えば、以下のような方法で思考・判断するよう指導しながら、記録、要約、説明、論述等の、Ｐ16, 17で後述する具体的な言語活動を授業の中に意図的に取り入れていくことによって、言語活動が充実した授業になっていくと考えられます。

類推
類似の点を元にして、他の物事を推し測る

比較
二つ以上のものを比べあわせて、その異同について考える

対比
2つのものを比べて、その相違や特性をはっきりさせる

関係化
2つ以上のものを、何らかのつながりをもたせて結びつける

分類
事物を一定の基準に従って種類別に分ける

照合
照らし合わせて確かめること

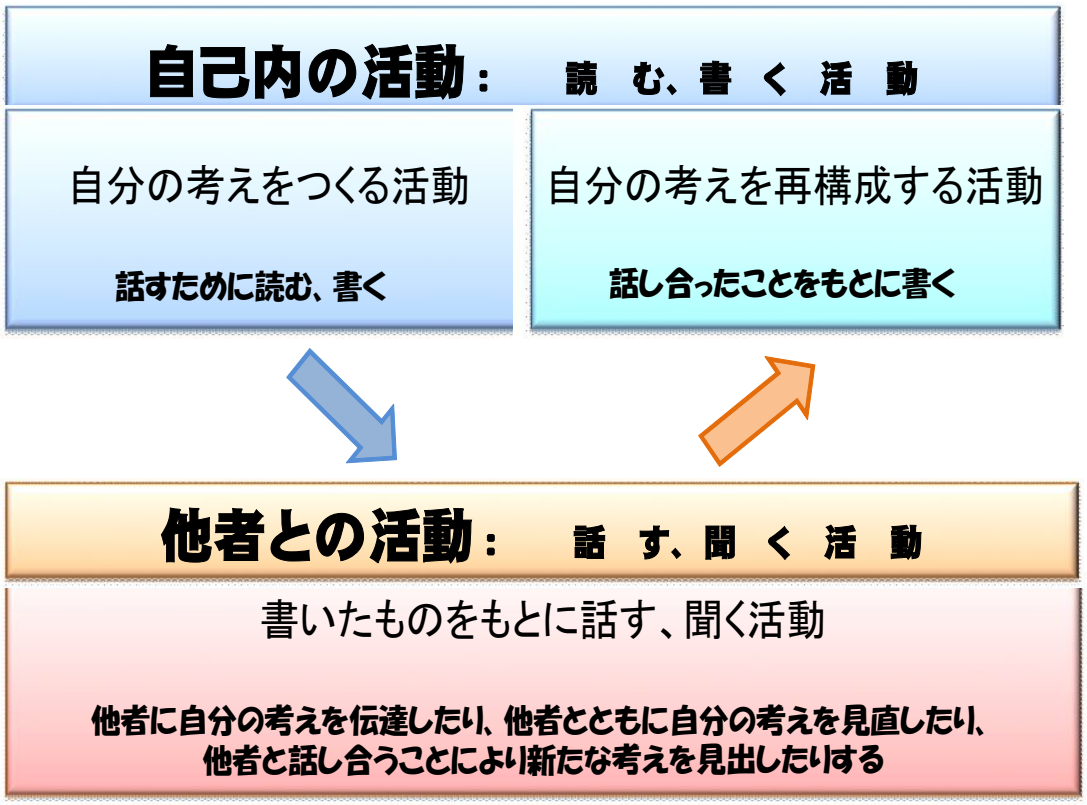
推理
2既知の事実や経験に基づいて考えをめぐらし、まだ知られていない事柄を推し測る

分析
複雑な事柄を細かな要素に分けて、その性質や構造等を明らかにすること

(1) 言語活動とは何ですか？

言語活動とは、何をさすのでしょうか。私たちは日常生活の中で人と話したり、人の話を聞いたり、読み書きをしたりしています。また、授業においても言語を使って学習内容を伝えています。そして、これら読む、書く、話す、聞く活動によって、私たちは思考したり判断したり表現したりすることが可能となります。

では、これから取り上げる言語活動とは何でしょうか。それは、読む、書く、話す、聞くを基本とする活動で、大別すると「自己内の活動」と「他者との活動」に分かれます。



平成21年度福岡県教育センター調査研究「思考力・判断力・表現力等を育てる各教科における言語活動の在り方」をもとに作成

この図のように、「自己内の活動」とは読む活動と書く活動を基本とし、言語を使って自分の考えをつくったり、自分の考えを再構成したりする活動です。「他者との活動」とは話す活動と聞く活動を基本とし、書いたものをもとに話したり、聞いたりする活動です。これら「自己内の活動」と「他者との活動」は相互に関連しており、その関係を表すと上図のように考えられます。

それでは、言語活動には具体的にどんな活動があるのか、考えていきましょう。

(2) 言語活動を取り入れた学習活動にはどんなものがありますか？

○　思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習活動

生徒の思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動を充実させる必要があります。そのために、中央教育審議会答申の「学習指導要領改訂の基本的な考え方」の中で、以下のような学習活動が重要であるとされています。

①　体験から感じ取ったことを表現する

（例）○日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌，絵，身体などを用いて表現する

②　事実を正確に理解し伝達する

（例）○身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③　概念・法則・意図などを解釈し，説明したり活用したりする

（例）○需要，供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす

○衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④　情報を分析・評価し，論述する

（例）○学習や生活上の課題について，事柄を比較する，分類する，関連付けるなど考えるための技法を活用し，課題を整理する

○文章や資料を読んだ上で，自分の知識や経験に照らし合わせて，自分なりの考えをまとめて，Ａ４・１枚（1000字程度）といった所与の条件の中で表現する

○自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり，これらを用いて分かりやすく表現したりする

○自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ，分析したことを論述する

⑤　課題について，構想を立て実践し，評価・改善する

（例）○理科の調査研究において，仮説を立てて，観察・実験を行い，その結果を整理し，考察し，まとめ，表現したり改善したりする

○芸術表現やものづくり等において，構想を練り，創作活動を行い，その結果を評価し，工夫・改善する

⑥　互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させる

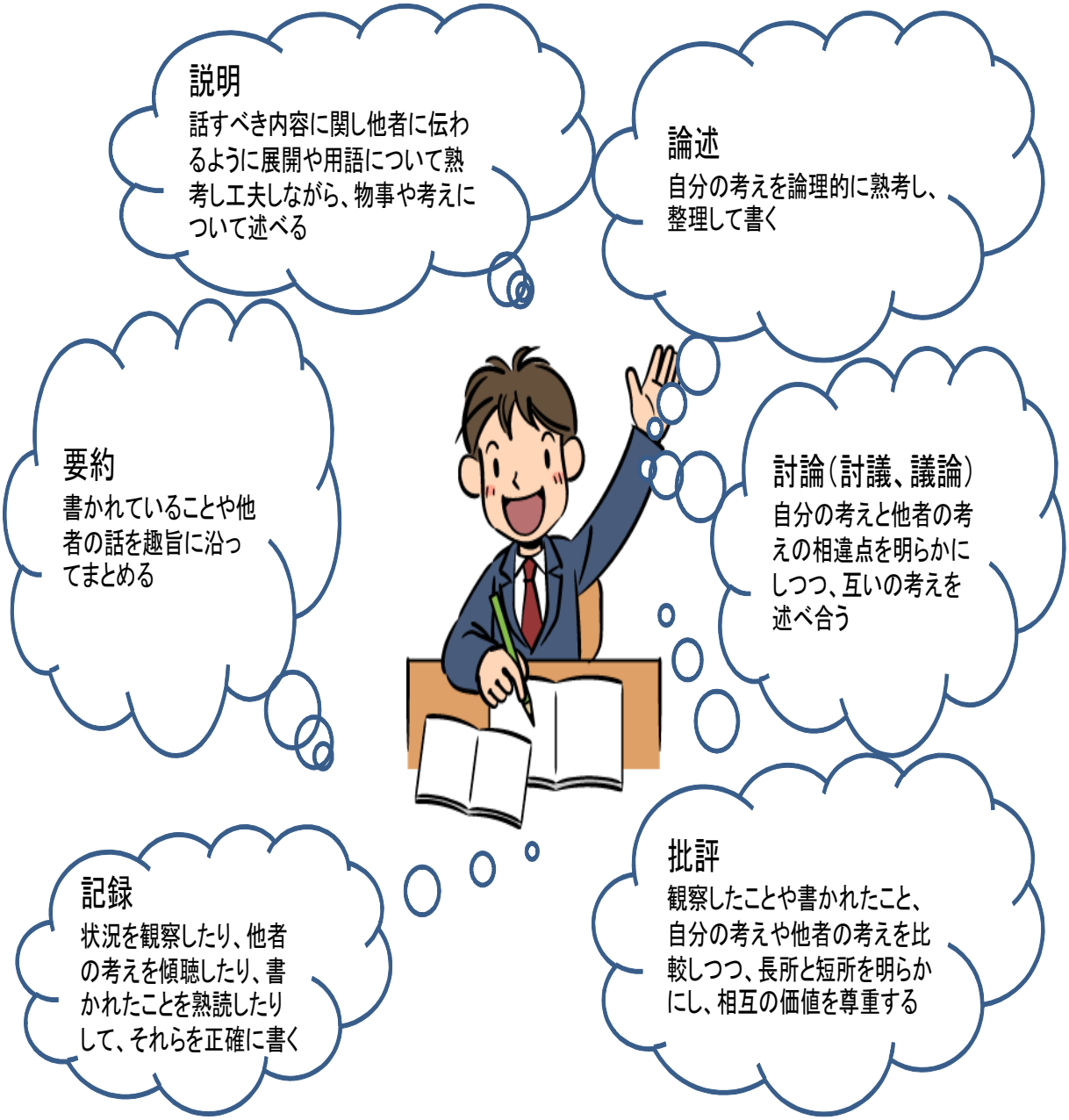
（例）○予想や仮説の検証方法を考察する場面で，予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う

○将来の予測に関する問題などにおいて，問答やディベートの形式を用いて議論を深め，より高次の解決策に至る経験をさせる

それぞれの学習活動の具体例からも、これらの学習活動はすべての教科で取り組まれるべきものであることがわかります。そうすることよって、言語に関する能力が高められ、効果的に思考力・判断力・表現力等の育成を図ることができると、中教審答申でも述べられています。ゆえに、上記６つの学習活動を各教科の授業に取り込む必要があるわけです。

○　言語活動の例

それでは、前ページの６つの学習活動に含まれる言語活動には、具体的にはどのようなものがあるのでしょうか。学習指導要領解説総則編では、各教科等において取り組む言語活動として、下図のものが示されています。実際に各単元を指導する際は、これらのいくつかを組合せて行うことも可能です。



なお、これらの活動のうち、記録、要約、説明、論述については、言語に関する能力を育成する中核的な教科である国語科において、小学校及び中学校を通じて例示されています。

○　「言語活動の充実に関する指導事例集」

「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」においては、次のような点を重視するよう求めています。

○帰納・類推，演繹などの推論を用いて，説明し伝え合う活動を行う。
○日常生活の中で気付いた問題について，自分の意見をまとめ説得力ある発表をする。
○社会生活の中から話題を決め，それぞれの視点や考えを明らかにし，資料などを活用して話し合う。
○グループで協同的に問題を解決するため，学習の見通しを立てたり，調査や観察等の結果を分析し解釈したりする話し合いを行う。
○新聞，読み物，統計その他の資料を基に，根拠に基づいて考えをまとめ報告書を作成する。
○実験や観察の結果，調査結果などを整理し重点化し，相手に分かりやすく，ポスターやプレゼンテーション資料などに表現する。
○テーマを決めて複数の本や資料などを読み，内容を比較したり，批判的にとらえたりするなど，知識や考えを深める。

また、「同【高等学校版】」においては、次のような点を重視するよう求めています。

○現代の社会生活で必要とされる実用的な文章を読んで内容を理解し，自分の考えをもって話し合う。
○文字，音声，画像などのメディアによって表現された情報を，課題に応じて取捨選択してまとめる。
○授業のまとめとして，その時間のポイントなどを説明する。
○課題についての自分の考え方を板書し，どのようにすればよりよい考えや表現になるかを考える。
○適切な主題を設定し，資料を活用して探究し，考えを論述する。
○観察，実験などの結果を分析し解釈して自らの考えを導き出し，表現する。
○学習の成果を互いに伝え合ったり，助言し合ったりして，新たな追究に向かう。
○自己評価や相互評価を通して，自己の変容を確認する。

(3) 各教科・科目の特質に応じた言語活動を取り入れた学習活動

学習指導要領では、各教科ごとにそれぞれの教科・科目の特質に応じた言語活動として、以下のような学習活動例が取り上げられています。

教科名 「科目（例）」	学習指導要領における記述例
国語 「国語表現」	○様々な考え方ができる事柄について，幅広い情報を基に自分の考えをまとめ，発表したり討論したりする ○詩歌をつくったり小説などを書いたり，鑑賞したことをまとめたりする ○関心をもった事柄について調査したことを整理して，解説や論文などにまとめる ○相手や目的に応じて，紹介，連絡，依頼などのための話をしたり文章を書いたりする ○話題や題材などについて調べてまとめたことや考えたことを伝えるための資料を，図表や画像なども用いて編集する
地理歴史 「世界史Ａ」	○現代世界の特質や課題に関する適切な主題を設定させ，（中略）その成果を論述したり討論したりする
公民 「現代社会」	○各種の統計，年鑑，白書，新聞，読み物，地図その他の資料を収集，選択し，それらを読み取り解釈する（中略），観察，見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりする
数学 「数学Ⅰ」	○自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり，議論したりする
理科 「化学基礎」	○観察，実験などの結果を分析し解釈して自らの考えを導き出し，それらを表現する
保健体育「体育」	○筋道を立てて練習や作戦について話し合う
芸術「音楽Ⅰ」	○楽曲や演奏について根拠をもって批評する
外国語 「英語表現Ⅰ」	○与えられた話題について，即興で話す。また，聞き手や目的に応じて簡潔に話す ○読み手や目的に応じて，簡潔に書く ○聞いたり読んだりしたこと，学んだことや経験したことに基づき，情報や考えなどをまとめ，発表する
家庭 「家庭基礎」	○子どもや高齢者など様々な人々と触れ合い，他者とかかわる力を高める（中略），衣食住などの生活における様々な事象を言葉や概念などを用いて考察する（中略），判断が必要な場面を設けて理由や根拠を論述したり適切な解決方法を探究したりする
情報 「情報の科学」	○生徒が主体的に考え，討議し，発表し合う

(1) 言語活動を充実させる授業構想の4つのステップ

各教科の目標の実現に向けて、言語活動を充実させるには、次のステップで授業を構想していくことが考えられます。

４つのステップ

1　生徒に付けたい力を明確にする

↓

2　付けたい力にふさわしい言語活動を選定する

↓

3　生徒の課題解決の過程に言語活動を取り入れた学習活動を位置付ける

↓

4　思考や判断を促す発問や指示を準備する

1　生徒に付けたい力を明確にする

各教科の学習指導要領の目標や内容等のどれを取り上げて指導するのかを明確にしておくことが重要です。

各単元の各時間ごとの授業において、観点別評価（４観点）を考慮して、どんな力を生徒に付けたいのかを明確にしておかなければなりません。そのためには、評価規準（具体的な生徒の姿で示したもの）を作成することを意識しましょう。

2　付けたい力にふさわしい言語活動を選定する

１で明確にした付けたい力を確実に育成できる言語活動を選定することが重要です。

各言語活動がどんな特徴をもち（P 16, 17参照）、指導過程にどう位置付けることが最適なのかを明らかにしておかなければなりません。

3　生徒の課題解決の過程に言語活動を取り入れた学習活動を位置付ける

各教科等の特質に応じて、生徒が自ら課題を見付け追究していく過程に言語活動を適切に位置付けることが重要です。

単に教師の指示通りに行うだけだったり、主体的な思考や判断を伴わない活動となってはいけません。

4　思考や判断を促す発問や指示を準備する

何についてどう思考し、どう表現するかなどを、生徒自らが意識できるようにするための具体的な発問や指示の準備をしておくことが重要です。

ポイントが絞られていない発問（例えば「何故そうなるのでしょうか」）や概括的な指示（例えば「意見を交流させましょう」「整理しましょう」）だけではなく、何をどう思考・判断し表現するかを生徒が的確に捉え、充実した言語活動となるように、発問や指示を準備しておかなければなりません。例えば、「□□となるのは何故なのかを○○の部分と△△の部分を比較して考えてみましょう」や「まず、自分の考えを１人ずつ班員に発表します。その後、どうすれば課題○○が解決できるかを話し合い、班の意見としてまとめましょう」などを準備するとよいでしょう。

(2) 言語活動を充実させるポイント

各教科・科目等の目標の実現に向けて、言語活動を充実させるには、次の６つのポイントに留意して授業を行うことが大切です。

１　具体的な評価規準を作成しておく
２　言語活動が充実する教材を準備する
３　生徒に思考・判断させる場面を設定する
４　自己内の活動を取り入れる
５　他者との活動を取り入れる
６　工夫した発問を準備する

１　具体的な評価規準を作成しておく

言語活動を取り入れた授業を構想する際、評価規準を作成することによって、目指す生徒の姿が明らかとなり、何をどのように指導すればよいか、どんな発問や指示を行えばよいかを明確にすることができます。また、この評価規準を通して、生徒は学習のめあてや学習の重点を明確に知ることができます。学習後は、教師の評価や自己評価等を通して､今後どのような点に注意して学習すべきかを考えることができます。他方教師にとっては、評価規準を基に生徒の達成状況を確認することで、自分の授業を振り返ることができ、授業改善へとつながります。

２　言語活動が充実する教材を準備する

これまで用いてきた教材に加えて､次のような自作教材を準備するとよいでしょう。

・様々な考えを出し合える教材
・生徒の意見が割れる教材
・生徒につまずきを与え、そこから解決策を見出させる教材
・比較や分類などを通して解決策を見出させる教材
・説明に工夫を要する教材

３　生徒に思考･判断させる場面を設定する

教えなければならない事柄が多いため、ついつい教師が多くを説明し、生徒にとっては、「ふーん」「そうなんだ」とわかったつもりになっていることが多く、生きた知識になっていない傾向にあります。生徒に思考させ「なるほど、そうだったのか」という発見につなげることが大切です。

４　自己内の活動を取り入れる

発問や指示をし、生徒に答えさせたり考えさせたりする場合、待つということが長く感じられるものですが、生徒が読んだり書いたりして思考したものをまとめるために、ある程度の時間を確保することが大切です。これが自己内の活動になります。

５　他者との活動を取り入れる

Ｐ14で示したように、「自己内の活動」で構築した考えは、他者へ話したり他者から聞いたりする「他者との活動」を通して、広がったり深まったりします。また、課題に対する解決方法などの新たな考えを創り出すことにもつながります。したがって、ペアやグループで協議（討議）させることが重要です。

協議させる際のポイントは次のとおりです。

・事前に生徒の反応や発言などを十分に予想しておく
・協議を促進するための適切な支援をおこなう
・思考する部分だけを重点的に協議させる
・協議に適した教材を用意する
・グループは４人構成が望ましい

また、様々な手法（ブレーンストーミング、ＫＪ法等）を用いることも効果的です。

６　工夫した発問を準備する

生徒の思考を深めるためには、工夫した発問を準備しておくことが大切です。

例えば、次のような発問が考えられます。

・答えが複数考えられる発問
・意見が割れ思考が広がる発問
・日常生活との比較や関連などを考えさせる発問
・既習の知識と比較し共通点や相違点を見付けさせ、関連付けなどを促す発問
・授業中には敢えて解答や解説を行わない発問

また、どういったタイミングで発問したらよいかも検討しておきましょう。

(3) 評価規準の設定と評価方法

各教科・科目等の目標を達成するため、すなわち思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、言語活動を充実させる必要があります。そのために、Ｐ21の１において、「具体的な評価規準を作成する」ことの重要性について述べました。

具体的な評価規準を作成し、生徒の達成状況を的確に評価するには、以下の３つの点に留意することが大切です。

１　評価規準を生徒の具体的な姿で設定する

評価規準は、学習指導のねらい（指導目標）が生徒の学習状況として実現されたとはどのような状態になっているかを「生徒の姿」で具体的に表したものです。
その実現状況の評価は、次のように区別して行います。
Ａ：「十分満足できる」状況と判断されるもの
Ｂ：「おおむね満足できる」状況と判断されるもの
Ｃ：「努力を要する」状況と判断されるもの

２　「思考・判断・表現」を適切に評価する

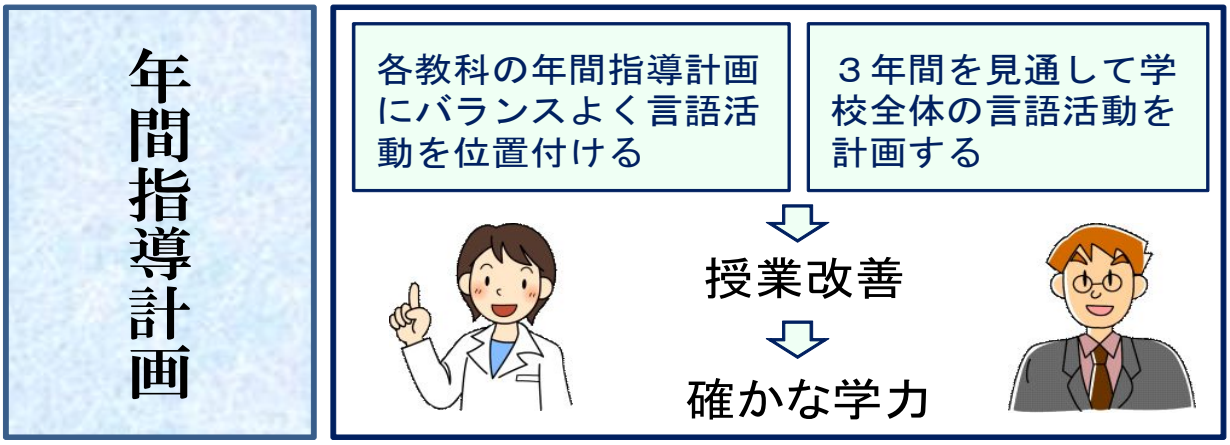
評価に当たっては、授業中の発表や発言（観察）、テスト、ノート、レポート、ワークシート、作品、質問紙、学習カード、生徒との対話などの活用が考えられます。これらの中から、生徒の達成状況を的確に評価できる方法を選択することが必要です。また、生徒による自己評価や生徒同士の相互評価を取り入れることも考えられます。
頭の中で思考・判断したことは、声に出すか、行動で示すか、文字等で書いて表現しなければ見取ることができません。よって、「思考・判断・表現」を評価するには、授業中の生徒の様子を観察する（生徒の発言や行動に留意する）とともにワークシート等を活用するとよいでしょう。

３　評価がＣの生徒への支援を行う

評価を行った結果、「努力を要する」状況の生徒がいる場合は、その生徒への支援を行うとともに、その後の学習指導の工夫改善に生かし、生徒一人一人の学習の定着に結びつけることが重要です。

(4) 年間指導計画への位置付け

年間指導計画を検討する際、各教科が目標とする資質や能力が生徒に身に付くように各単元（題材）において、４観点（関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解）をどこで育成するかを明確にします。その際、思考力・判断力・表現力等の育成をねらう箇所には、適切に言語活動を位置付けることが大切です。



１　年間指導計画に位置付ける重要性

言語活動の計画は、年間指導計画等を用いて作成していることと思います。しかし、単元（題材）ごとの観点別評価規準や言語活動については、いかがでしょうか。

年間指導計画の単元（題材）ごとに言語活動や観点別評価規準を記述する欄を設けてみてください。このことによって、これまでの授業スタイル（知識や技能の習得を目標とする授業）を、知識や技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視した授業へ変えることが可能となります。したがって、年間指導計画の単元（題材）ごとに言語活動や観点別評価規準を位置付けることは、今求められている授業改善への第一歩であり、学校全体で推進することが重要です。

２　位置付ける際のポイント

言語活動を年間指導計画に位置付ける際は、各単元（題材）ごとに計画的に位置付けます。また、どんな目的でどんな言語活動をどこに位置付けると効果的かを十分に検討することが大切です。よくある失敗例としては、「言語活動には生徒はよく取り組んでいたが、十分に本時のねらいを達成することができなかった。」などが挙げられます。

生徒にどんな力を付けさせたいのか、そのために適切な言語活動はどんなものなのか、最も生徒に考えさせたい（発見させたい、気付かせたい）ことは何なのかを明らかにすることが大切です。